

天安門事件「暴徒」のオーラルヒストリー

廖亦武著／土屋昌明 鳥本まさき
及川淳子訳

銃弾とアヘン

「六四天安門」生と死の記憶



四六判 380頁
白水社
【本体 3,600円 + 税】

阿古 智子

一九八九年の天安門事件に関わった、あるいは巻き込まれたのは、学生や知識人などのエリートだけでなく、無名の何十万人もの平凡な市民たちでもあった。天安門事件については、数

多くの記録や研究が発表されているが、本書のように、「暴徒」のオーラルヒストリーを描いたものはこれまでほとんど見られなかった。題名の「銃弾」は天安門事件の弾圧を、「アヘン」は、金儲けに走る人々の脱政治化＝奴隷化をたとえている。

六月四日の夜、作者の廖亦武は四川省にいた。北京から来ていたカナダ人ジャーナリストと夜通し短波ラジオでBBCなどを聞き、天安門広場やその周辺の音が皮膚に染み込んでいったという。その時に感じたことをもとに廖亦武が創作した長詩『大虐殺』は全国各地で評判となり、詩の録音テープが地下で取り引きされるようになった。廖亦武は逮捕され、

懲役四年の身となった。獄中で数々の暴行を受け、自殺を図るなど苦しんだが、八四歳の受刑者で秘密結社の頭目だった僧侶から籊を習い、絶望の淵から救われたという。

二〇一九年六月九日、東京大学で開催したシンポジウムで廖亦武は、この僧侶が「自由は自分の内心から得るものだといいことを教えてくれた。自分が入っていたのは壁のある小さな監獄だった。しかし、監獄の外にも、壁のない大きな監獄がある。自由は探し当てられるものではない。自分で壁をドンドンこえていく、そのプロセスが自由なのだ」と述べた。

* * *

一二月初旬、私は香港にいた。香港では二〇一九年、犯罪容疑者の中国本土への引き渡しを認める「逃亡犯条例」の改正案への反対からデモが始まり、警官隊とデモ隊との間の衝

突で、実弾の発砲によって負傷者が出るまでに至った。私が香港を訪れたのは、有権者の七割以上が投票し、民主派が歴史的勝利を収めた区議会議員選挙の後で、選挙を通じての意思表示に人々が自信を強めたところもあるのか、香港の街はかなり落ち着きを取り戻しているように見えた。ただ、慌ただしく修復された建物の破壊箇所や、落書きに上書きされた塗装など、いたる所に残された傷跡が痛々しかった。

二月八日、世界人権デーに合わせてデモ行進が行われた。主催者発表で八〇万人が参加し、警察の暴力行為を調べる独立調査委員会の設置など、「五大要求」を受け入れるように香港政府に迫っていた。私も参加したが、繁華街の幹線道路が人で埋め尽くされ、スローガンを叫び続ける人々の熱気に圧倒された。夜になっても人々は携帯電話のライトを照らしながら行進を続けていた。デモ隊のテーマソングともいえるべき「香港に栄光あれ」を歌いながら歩く人々は、目標に向かって、強い一体感を感じているように見えた。キラキラと輝くライトの光が、夜空に美しく映えている。なかなか途切れない人の波の中で、少しだけ空いていたスペースを見つけた私は、少し休憩しようと列から離れた。

その時、私の背後に上から下まで黒づくめの服装の六一七人の男女の集団がやってきた。空いていたスペースは中国系銀行の入口の前で、人の波はそこだけを避けるかのように動

いていたのだった。男女は幼い顔をしている。中学生ぐらいだろうか。そのうちの一人が鞆から黒色のスプレー缶を取り出すと、銀行のシャッターの上に「五大要求、一つも欠かせられない！」「中国にノーを！」と大きく書いた。集団が落書きを終えて立ち去ろうとしていた時、半ダースの卵が入ったケースを腕に抱えていた集団の一人が後ろを振り返り、卵を一つ取り出してシャッターに投げつけた。シャッターにぶつかり、「バチャン」という音を出しながら豪快に割れた卵は、黄色い液体をシャッターの上に噴出させた。それを見た若者たちは、ケラケラと笑いながらその場を立ち去った。

黒い傘を持っているメンバーは、落書きをしている者たちを傘でガードしていた。彼らは、目元を除く顔と頭全体を黒いフードとマスクで覆っていた。監視カメラに映っても身元がバレないようにしたいのだろう。落書きは一瞬の出来事だった。私はすぐ横にいたというのに、息を潜めて見ていただけで、若者たちに何も言葉をかけることができなかった。そして、私の頭に「暴徒」という文字が浮かんだ。この子どもたちは「暴徒」なのか……。

* * *

三〇年前、中国大陸で一〇〇万人をくだらない武装していない「暴徒」が、完全武装した軍人と対峙した。戦車と装甲車が先導してバリケードにぶつかると、そのまま人々を押しつぶし

ていった。人々は刈り取られる雑草のようにバタバタと地に倒れた。機銃が掃射されると、辺り一面には銃声と血が広がった。

逮捕された「暴徒」には、運動と全く関係なく、ただの通りすがりの人もいた。真摯な愛国心から闘争に加わった者は、多大な犠牲を払った。逮捕され、拷問され、投獄され、そして、労働改造所で労働を強制された。出所しても、結婚生活は破綻し、キャリアを失い、拷問や長い監獄での生活が原因で性機能に障害を抱える者もいた。車を焼いた「暴徒」は銃殺刑に処され、重大な知的障害があるとして減刑された者は、出所後しばらくして、北京五輪の強制立ち退きで帰る場所がなくなり、街のホームレスになった。

一九八九年に一九歳だった武文建は六月三日の夜、声援のために街に出ていたが、幸いにも弾丸は彼の頭をかすただけだった。しかし、「血の償いを求める」という演説を公に発表したため、反革命宣伝煽動罪で懲役七年の判決を受けた。北京から農村にある実家に戻って潜伏していた武文建が逮捕されたのは、彼の父が公安局と口頭の約束を交わしていたからだった。父は政府と党を信じている。地元警察にとつて暴乱分子を逮捕するのは、手柄を立てるまたとないチャンスだ。

退役軍人の身で「暴徒」となった人も多数いた。軍人として、兵士が群衆に殴られるのは望まないが、学生たちが銃弾

を食らうこともおかしいと考える、とても純粋な気持ちから矢面に立ち、軍用車を阻んだ。その結果、猶予付き死刑や無期の判決を受けた。

兵士に糧食を届ける給養車を差し押さえ、飢えている学生と市民に食べ物を分け与えた者は、車が空になったと思いが、車の隅っこにニワトリの丸焼きが一つ残っているのに気づかなかった。自分のために食べ物を取っておくことなど全く考えてもいなかったというのに。このニワトリの丸焼きは起訴状に登場し、彼は一三年の判決を受けた。「あのニワトリの丸焼きは高くついた！」と、ユーモアたっぷりに振り返るまで、彼はどれだけの苦勞をしてきたのか。

自発的に天安門広場における群衆の秩序維持にあたったいた者たちも、次々に逮捕された。広場糾察隊（ピケ隊）の隊長だった劉儀は、反革命凶器準備集合反乱罪など、二度の判決で計一四年の懲役刑を科された。古参共產党員の親の下に生まれたこの北京つ子は、文革で下放された知識青年だった。北京に戻った後、国営部門での仕事に嫌気をさし、チューインガムを売ることから始め、商売で身を立てられるようになった。そして、国のため、民のため、腐敗や官僚ブローカーに反対する書生たちを見て、熱い血が頭に上った劉儀は、もともと一面識もない人々を組織してチームを作り、広場の秩序を維持す

る活動を始めた。代表を数人選出して共に隊を率い、最初は三〇人程度だったのが、のちに二〇〇人を超えたという。

労働者や地方出身者が独自に結成した黒豹決死隊で、デモの秩序維持やパトロール、学生や解放軍兵士の慰問を行っていた当時二四歳の胡中喜は、銃弾が飛び交う中逃げ延びたが、誕生日に逮捕された。監獄では凄まじい拷問を受け、出所してから自宅が立ち退きに遭い、その上、銀行口座が抹消されていたため、立ち退きの補償金ももらえないという不当な扱いを受けた。

人民解放軍の車両に火をつけたり、天安門の毛沢東に卵を投げつけたりした者たちもいる。感情が高ぶり、出来心でやったのだろうが、前者には反革命放火罪で死刑判決（執行猶予付き）が下り、後者の三人はそれぞれ悲惨な生活を強いられた。パフォーマンスアーティストの余志堅は反革命破壊宣伝煽動罪で無期懲役の判決を受けるが、二〇〇一年に釈放された。その後、二〇一七年に亡命先で病死している。魯徳成は懲役一五年の刑に服した後、タイに逃亡して政治亡命を申請したが、拒絶されてしまう。喻東岳は二〇〇六年二月に釈放されたが、その時にはもう精神に異常をきたしていた。

早々に国外に脱出した学生リーダーたちは、奨学金を得て学んだり、ビジネスを始めたりして、新しい生活をスタートさせた。その一方で、長い間服役していた「暴徒」たちは、

出所後も不遇の人生を歩んでいる。

この本が丁寧に描き出した「暴徒」の感情や思考には、愛と苦悩が満ち溢れている。中国と香港。時代を超えて浮かび上がる「暴徒」というラベルは、いったい誰が貼っているのか。大人たちは、運動に参加し、関わってきた人たちの複雑な背景や思いを真正面から受け止めず、「暴徒」というラベルを使うことで、見るべきものを見てこなかったのではないのか。

* * *

二〇一一年、すでに五〇歳を超えていた廖亦武は、黒社会（闇組織）の口利きで、中国とベトナムの国境を超えた四〇〇〇元のデポジットを払い、国境を越えることができたから四万円を払うことになっていたという。何度も出国を阻止され、海外に行くルートがなかった廖亦武は、危うい船に飛び乗った。

廖亦武は現在ドイツに在住し、執筆、詩の朗読、講演などの活動を続けている。長年軟禁生活を強いられていたノーベル平和賞受賞者・劉曉波の妻・劉霞が心身の自由を取り戻せるよう、廖亦武はドイツのノーベル文学賞受賞者・ヘルター・ミュラー氏らを通してメルケル首相に手紙を書き、ドイツで劉霞を受け入れるよう求めていた。そうしたやり取りについても、本書の最後に書かれている。

（あこ・ともこ 東京大学）